

第三章 下西校区

第一節 下西校区の概要

下西校区は、本市の西部に位置し、市街地に隣接する校区である。校区北部及び沿岸部は住宅地が広がっている。校区北部から西部は海に面し、「城ノ浜海浜公園」、「漕泊港」を有する。川迎が中心地であり、下西小学校がある。種子島は法華宗の島だがこれを伝えたのが日典上人で、この上人を祀る日典寺に上人の墓である極彩色の日典御廟がある。相撲では二五代横綱



図8-8 下西校区の位置

の西之海嘉次郎と柔道の遠藤清が川迎。下石寺には甘藷初栽培の大瀬休左衛門、池野には昭和十一年（一九三六）より西之表町長を約一〇年間務めた榎本小右衛門などを輩出。昔は目立たない小さな校区だったが、現在は地の利で人口が増えて二〇〇〇人を超え、市内では榕城校区に次ぎ多い。若狭公園・箱崎海岸・市営グラウンド・市営プールがあり、のびのびと思切り体を伸ばす場所がある。

買い物はドラッグストアが三カ所あり便利である。ほかに国の機関である「合同庁舎」（ハローワークや簡易裁判所など九部署）や「種子島警察署」や島内唯一の「種子島産婦人科医院」や「種子島清掃センター」「自動車学校」もある。スポーツも盛んで市の体育大会や駅伝競走でも優勝を争うようになっていく。伝統行事はなくなったものも多く、池野・川迎・上石寺・下石寺の掛け打ち太鼓、川迎の盆踊り、漕泊の船祝い、上石寺の高砂、鞍勇の年どんなどがなくなっている。特に惜しいのが掛け打ち太鼓と盆踊りと船祝いである。福祭文・蚕の宮じょう・破魔祈禱・六月燈・願成就・牧祈禱・虫供養・温座祈念などは現在まで受け継がれている。区の最大の呼び物、八月の城の浜夏まつりでは下西魂がはじけている。

川迎・池野・漕泊・上石寺・下石寺・鞍勇・若宮の七集落から成り、人口は二〇九八人である（令和五年〔二〇二三〕十一月末現在）。

第二節 下西校区の成り立ち

下西とは藩政時代の下西之表村の区域であるが、当時より範圍は少し狭くなっていると思われる。北は甲女川で榕城と、南は上二つ川で住吉と、東は古田校区と接する。鴨女町・朝日が丘は現在榕城校区に属している。古くからある集落は池野・川迎・漣泊・上石寺・下石寺である。池野は池があったから（現在は埋め立てられてグラウンドになっている）、川迎は赤尾木から見て川向うだからとか、殿様を棧敷に迎えるとき、綿打川で迎えたことから名がついたともいわれる。漣泊は海の士（安徳帝）が泊まったことによるといいう説もあるが、『種子島家譜』には「尼泊」という表記もみられる。漁業集落だったが現在は組合員一四人と、漁業一筋という人は数人になっている。石寺は寺があったから名がついたともいわれ、下石寺は寺があった場所もわかっている。石寺は塩屋集落で、上石寺と下石寺に分かれたのは、宝永三年（一七〇六）である。上石寺が本家で下石寺が分家だという。元からあったのは下石寺であるのに塩屋の本家は上石寺であると集落の古老は語る。鞍勇は甌島から明治十九年（一八八六）に移住してできた集落であるが、道が悪くて馬の鞍が激しく揺れたことから名がつき、柳田ホイドンの命名と伝わっている。お茶が特産だったが、現在はお茶を作る家はない。どの集落も農業が主な産業であったが、現在は専業はごく僅かで、公務員か会社員がほとんどである。若宮は昭和

五十五年（一九八〇）に三棟の団地ができたことにより始まり、付近の数戸を合わせて下西七番目の集落となった。無線集落は昭和四十四年に創設され、平成十九年（二〇〇七）に若宮と合併した。

第三節 地名・字名

池野

西浜伏(まつおの坂)・池野・深田・田ノ神田(うつくしが峯)・大園・屋久田(がんだ)・上ノ園・池野下・西行座野・行座野・椎山田・椎山田比良・赤坂ノ下・赤坂・長迫・樵谷・黒牛ヶ谷・上畑

川迎

河口・西之浜・川迎・入佐・御前山・西之原・名ヶ迫・蔵野(もんのこう)・山之尻・多免野(寺ん前)・山之瀬・栗木ノ大田・東ノ原(はろ)・上ノ田・岩迫・屋敷内・圓山作・西之隅・東之隅・荊河間伏・馬渡瀬・七俣田・上ノ田比良・森瀬(さるうじ)

漣泊

番屋(門の下・そうず)・若宮(ひろ浦・竜の浦)・南若宮(白石)・中之野(じゅうめん坂)・丸畑・上ノ河・白水原・荒蒔田(あいまさら・無線の坂)・中ノ渡瀬・松原口

鞍勇

花里坊(しようべん坂)・月夜野・猿垣・丸山・大荒目(ひまごい)・水溜・帆柱(六人もや)・犬山・正泉坊(しおま

き)・山津畑・大流合・大山崎・落嵐(九人もち・ともいちごう)・婆女鼻

上石寺

古牧・折口(ようさく)・野別府(のべんしー)のびようむかえ)・大門(一本松・いさこうば・門のうえ)・枯木橋・榊木ノ小田(てつけん)・小谷(うつちやいろ)・かざー・こら)・上石寺(へた・いば)・半太坂(でぐち)・黒石平(ほき・ひとがいの坂・いばん山)・松元(ねらーば)・尻切・茶屋平・金丸田(むつまし)・山本・室屋田・向牧(つとーむね)・脱竹迫・尻尖(ひとがい)・すくぼが峯)・山五郎・大荒目(おーばな)・おらん牧・かみんた)・藤八・蛭町(のだんた・え)・猿見間伏・麦田・屋之平・平田・桑ノ木小田・川原・本水口(ほんめんぐち)・白崩(にた・とうじん)・とうじんの坂・つづいがとう・ひやみん谷

下石寺

大畑(こばまん坂)・下石寺(くやまじい)・長畑・稗畑(はーまつ)・脱竹畑・中長谷・鴻之峯(おろ)・嶽ノ中野(いさき山・たけんた)・といの峯)・大流合・増田長谷

南若宮

南若宮

第四節 歴史的特殊性

種子島の製塩は島主の手厚い保護と特権のもと、最終的には二四集落を教え、上納として塩を納めていた。『種子島家譜』に「初めて塩釜を建つ、第一は西之村の立石、第二は国上村の湊、或いは云ふ、第一大崎、尼泊、第二久志瀬戸、竹之川なり」とある。石寺は大崎から五郎右衛門という人物が来て製塩を始めたという。昔、上石寺と下石寺が「石寺」として一つだった頃は、島内最大の塩屋だったと聞く。上石寺は年間七九俵を上納していたという。宝永三年（一七〇六）に上石寺と下石寺に分かれた。最初は下石寺で塩を焚き、後で上石寺の大瀬の岡に移動したと伝わる。上石寺塩釜神社境内に「上石寺塩屋牧祈念碑」があり、ほかに「上石寺塩屋牧地由来記」という古文書も残されており、その縁起が書かれている。塩釜跡は神社下にある。釜跡の残り（粘土）と思われるものが少し残っていて、直径四テビくらいであったようだ。深さもあり網などが捨てられている。ここに「火の神様」と言われる石碑が建っている。高さ一三テビ、石碑前には祭り場の平らな石がある。十二月初旬、「塩祭り」が行われていたが、現在は令和元年（二〇一九）に神社前に「塩釜の地記念碑」を建て、ここで行っている。塩釜跡から二〇テビくらい離れた所に「潮汲みつばき」と呼ばれる干潮時には塩たまりになってしまう場所があり、ここから潮を汲んでいたと考えられる。この中間地点には石と漆喰で造った

「潮溜め」（長さ一七八テビ、幅七一テビ）がある。下石寺の塩釜跡は現在、国道の下になっている。

上石寺の串目書（塩屋牧境）

上石寺の牧境を記した古文書が多く残されているので、引用して次に示す。

上ハ樋ヶ崎より海士泊之後 松原口岩迫之田縁上り 向井ノ牧野上り 土取ミネ上り毛利坊山下り 帆柱 峯下拂島内之野迄犬山上り郡司殿平 入口ニ掛り 大和島より正仙坊田上り柳木の平小山頭より さいけんまぶし 不利下り一ツ葉が峯 小たをより峯下り 藤八が谷上り冷水谷下り
右者前々より牧内方角被下置候處寶永三戌年大瀬之岡塩屋壱軒並人家新地ニ取立候依之又々牧願申出候ニ付て各見分之上申付五月廿一日ニ、打込目録相渡置候處牧分目録願申出候付て去秋役人西村九郎左衛門 物奉行川内仲左衛門高奉行岩川理兵衛 上妻助左衛門差越見分之上牧分申付兩塩屋銘々ニ目録相渡者也
享保六年丑九月十九日

上石寺塩屋牧地記念碑

上石寺塩釜神社境内にあり、塩屋の縁起が書かれている。その碑文である。漢文の碑文を読み下したものが『種子島碑文集』

第一集に掲載されているので引用する。なお、引用に当たっては、西暦を追記した。

寶永三年（一七〇六）、邑主より塩屋一軒の宅地及び石寺塩屋牧地の幾分を賜はり、石寺より大瀬の岡に移し、製塩に従事す。ここに於て下石寺、上石寺の称あり。これを上石寺の濫觴となす。塩屋牧地の境書は享保六年（一七二一）九月十九日の賜に係る。明治初年、地租改正の挙あり、二、三等の土、我が塩屋牧地を以て云々せんと欲し、事すこぶる紛糾す。すなはち石村次右衛門、寺口休次、上田庄七、石原周助、古元喜助、竹原伊平次の六人を推して委員となし折衝せしむ。事容易には決せず、つひに中学教員前田、渡辺二子に頼り、囑するに仲枉の事を以てす。二子謹議正論大いに努む。すなはち公簿面積六十七町歩ことごとく賜はりて我が有となる。爾後幾部を売りて分配し、或いは共有金となす。大正二年（一九一三）より昭和二年（一九二七）に至るまで、部落防風林地を存し、皆分筆をなし各戸に配当す、それ報本反始は人倫の大道なり。吾が部落百七十口、今日、口を餉し、冠婚葬祭をなし、仰いでは養ひ俯しては育するを得るの資、一として牧地の恵みに頼るにあらざるはなし。ああ、累代邑主の沢、先人努力のたまもの。あに忘るべけんや、よつて胥議りて碑を建て、後世子孫をして報本の大道を忘るなからしむ。つつしめや。辞に曰く、先賢の顕れざる、罪、後賢に在り。覆戴の徳、地

の如く天の如し。

昭和三年（一九二八）三月吉日

上石寺塩屋牧地由来記

上石寺集落には、塩屋敷の由来を記した古文書が伝わっている。内容は、以下のとおりである。なお、原文のカタカナはひらがなに改め、読みやすいよう句読点と西暦を追記した。

石寺部落は大字西之表の南端に位して大字住吉と相接す。古記を案するに、邑主の命に因り、西之表大崎塩屋より五郎右衛門と云う者をして此に移住せしめ塩屋牧地製塩燃料林・駄馬牧場を賜ひて製塩に従事せしむ。後戸繁家殖宝永三年（一七〇六）邑主

大瀬の岡に、塩屋一軒宅地及石寺塩屋牧地の幾分を賜ひ製塩を業とせしむ。是に於て下石寺・上石寺の稱あり。是を我上石寺の濫觴とす。当時若し居民無きとせば、一家族にて製塩を為す能はず。故に已に若干の居民ありしなるべしと雖も、文献



上石寺塩屋牧地記念碑

の徴すべきなし。塩屋牧地境書（串目書と云ふ）は享保六年（一七二一）九月十九日賜ふ所にして、今尚什寶とす。然して毎年塩七十九俵二斗四升入を邑府に納む。即恒例となりて明治維新に及べり。會官地租改正の挙ありて檢地を行ひ其所有権を確保す。二、三策士ありて、密かに吾塩屋牧地を下西之表全部の共有に為さんとし、已に當路吏員と默契する所有りし者の如し。吾之を知り大に驚き石村次右衛門・寺口休次・上田庄七・石原周助・古元喜助・竹原伊平次を委員とし、牧地境書を示して其の非を鳴らし、百方吾所有なるを主張せしも有司は徒に威嚇を是事とし、敢一瞥だも與へず。是に於て相議し平山寛藏・桑山定芳二氏に依頼し、交渉する所ありしも遷延決せず。追日吾々不利に赴くとの蜚語を聞くに過ぎず。因て更に種子島中学校教員前田讓藏・渡辺昌藏二氏に就きて伸枉の途絶へしを告げ助力を乞ひ、哀願して殆涙を垂る。二氏憐みて之を容し、當路者に対し抑非申正論議大に努む。是に於て有司其理を阻むことを得ず、遂に公簿面積六十七町歩全然吾共有に帰せり。其の得意歎喜想ふべき也。後、中野・古牧・折口・向牧・若宮を売りにて公債を購入し基金とし或は分配し次で帆柱を売りにて共有金とし、更に大正二年（一九一三）白崩、大正十四年（一九二五）大荒目、昭和二年（一九二七）防風林を存じ餘は全部之を分筆し各戸に分配したり。地租改正當時二十戸の吾部落は、分配當時は三十戸なりき。冠婚

葬祭仰養俯育一に皆牧地に資せざる無きは誰の責ぞ。皆是累代邑主の徳澤先人苦心の恩恵に非らざるは莫し。豈一日も忘る可けんや。故に牧地紀念碑を建て後世子孫をして報本の大道を忘るる無からしむ。三十一行十の字下二を脱す寺口善四郎墓地内に開山精霊と稱する墓石ありて、正月・宇蘭盆邑民香華を供へ本部落の草創者と稱す或は然らん乎。大正十四年官法を設け区字等の共有林野を統一して、是を町村有に転せしむ。有司吾塩屋牧地亦統一せんとの意思あり。則、上田庄太郎・石原周吉を委員と為し其の奔走に頼りて、統一の厄を免れ愁眉を開くを得たり。本島製塩業は南種子村西之立石を鼻祖とす。故に毎年正月立石塩屋より邑主邸に参候し、全島塩屋を代表して賀正の式を行ひしか、一年降雨の為に川に阻まれ我上石寺をして代て其式を行はしむ。爾來立石の途遠く費多きを以て我をして代らしめ、以て恒例となり明治維新の際に及べり。

昭和三年三月 応需 遠藤家彦 謹撰并書

下石寺の串目書

『近世の種子島における放牧』（安田 一九六一）によれば、下石寺の塩屋牧は、北が「ひのみづの谷上り、大谷小谷をへてさいけんまぶしの谷上り、正泉坊の谷下り」、南は「くじのとうのはな上り：」で尾根伝いに南東方向に境界が延び、この牧は鞍勇付近まで広がっていた。

日典上人

種子島は十五世紀から明治まで約四〇〇年の間、全島法華の島で、法華宗は島の文化、生活に大きな影響を与えた。この法華宗を伝えたのが日典上人である。日典は応永八年（一四〇一）、西之表川迎、蔵野に生まれた。日典については、正確なことはほとんど不明である。日典の幼い頃や少年、青年時代のこともわかっていない。両大本山（京都能善寺、尼崎本興寺）にも詳しく書き残されたものがない。文献が少ないためはつきりしないが、ともかく幼少の頃から神童といわれ、のちに島内一の名寺といわれた律宗の慈遠寺に入り得度、義賛坊林応という名をもらい修行に専念した。種子島に仏教が伝わったのは、国史に種子島の名が出てくる天武天皇六年（六七七）の頃と言われているが、これより二五年程前から仏教の交流があったといわれている。日典の生まれた頃の種子島は律宗であった。律宗は中国において盛んになり、鑑真が日本に渡来し、唐招提寺を造ったことで、大変な勢力を持つようになり、全国に広まっていった。種子島でも律宗が盛んとなり、慈遠寺、大会寺などが次々と建立された。慈遠寺は、奈良の興福寺の末寺として建てられ種子島律宗の本山とされていた。現在の西之表、八坂神社を中心にした春日山、西町の一部を含む広い境内で、釈迦堂、祖師堂、拝殿など種子島一の大刹であったが、明治初年（一八六八）の廃仏毀釈で破壊され現在は何も残っていない。「慈遠寺」と書いた手洗鉢がその名残りを示しているだけである。歴代島主

の信仰も厚く律宗に帰依していたことから、種子島全島に律宗が広まっていた。林応は師や先輩について修行を重ねていたが、種子島島主左近将監幡時の弟晴時とともに島主の命で、南都に遊学することになった。まず興福寺で勉強し、さらに延暦寺やその他の寺で行と学の勉強をし、約七年間修養したのち、宝徳三年（一四五二）に種子島への帰途に着いた。堺の港で船待ちをしている宿で旅の疲れをいやそうとあんまを呼んで肩をもんでもらった。あんまの名はだいち大都という熱心な法華宗信者だった。大都に肩をもんでもらっているうち、仏道についての議論となり、話がまとまらなくなってしまったので、林応は次に法華宗の寺堺の顕本寺住職日浄上人に法論を挑み、三日間論争したが負けた。遂に日浄上人の教説の正道に、これこそ自分が種子島にいた時から探し求め、南都北嶺に修学中も、心の片隅でうずいていた真実の仏教への探求の心が満たされた。これこそ庶民の仏教であり、生きている宗教であると感じたのである。林応は日浄の師、尼崎の本興寺の日隆上人について修養することにし、改めて法華宗による得度の儀式を行い、僧名を定源院日典と改めた。少年時代より律宗としての修行を身につけ、島内に多数いる律僧の中から、その秀才を買われ島主からも特に眼をかけられ、喜道の給仕随行者に選ばれた日典上人であるから、たちまち頭角をあらわし全国から集まっている学生の教養に当たる勸学院（現在の法華宗興隆学林）の学頭に抜擢された。法華宗年表によると、本興寺にいた日隆聖人が、従来あった

学室を、全国の学生に開放して勸学院を創設したのが享徳三年（二四五四）とある。日典上人が改宗したのは宝徳三年（一四五）と伝えられている。すでに七〇歳を迎えられた日隆聖人は数多くの学問書を著し、続いて法華宗で大事な教養である宗要集を述作中で忙しかったため、日典を学頭（学長）に抜擢し、子弟の教養に当たったのである。しかし、故郷を出てから二〇年が経過した日典は、望郷の念にかられるとともに、修行の成果を島民に伝え全島あげて法華宗へ改宗させようとの思いがたかぶってきた。同時に故郷は律宗が主流であり、また自分は主命に背いて改宗をしていることから、どのような咎めをうけるかわからない。さらに律宗からの迫害も覚悟しなければならぬ。もし自分が迫害をこうむり落命したら、二陣、三陣の後継者が必要となる。日典の思いが仏天に通じたのか、日典の弟子の淡路島出身の僧日良は、自分がその第二陣となつて種子島に渡り後継者になることを申し入れた。日典上人は日良上人に励まされ、寛正二年（一四六一）堺を出発した。時に日隆聖人は七十七歳、日典上人は六一歳、日良上人は三二歳であつた。島民は「都で律宗を勉強した林応が帰つて来た、さぞ立派な学僧になつてゐるであろう」と大歓迎だった。慈遠寺での説教にはたくさん僧や島民が集まり、慈遠寺の本堂は満堂となつた。ところが日典の説教は「法華宗こそ真の教えである。庶民の宗教であり我々の苦しみを救うもの。律宗は過去の教えこれを信ずる者は国賊だ」と話し出した。島主をはじめとした島民や僧は驚いた。

「林応は気が狂つた、この寺で修行しながら国賊とは何事か」と罵声をあげせ、慈遠寺の門外へ連れだした。日典は慈遠寺を破門され、島主からも追放され、蔵野浜へ帰つた。ここでも迫害にあいながらも辻説法をやめなかつた。やがて日典は小川のほとりに小庵をむすび住み、さらに人々の教化のため街頭に立ち布教した。やがて島主幡時が死去し、一代時氏に変わった。こうしている間に島の情勢も大きく変わり、日典の熱心な布教活動により次第に信者も増え、ひそかに食物を持つてくる人もいた。日典も従来のようながむしゃらに近い強引な辻説法はやめ、草庵にこもり、島主時氏へ諫奏文を書いて帰依を勧めた。時氏も密かに感じるころがあり、日典の警護役に二人の側近の武士を遣わしている。すなはち徳永、高尾野両氏である。しかし島民の反感は強く、寛正四年（一四六三）四月、日典が小屋で読経中、武士を中心に暴徒の一団が襲い、浜辺に穴を掘り生き埋めにし石を重ねた。日典は「私は死んでも魂は生き抜いて正法を叫ぶ」と言い、題目を唱え続けた。生き埋めにされても七日間の毎日土の底から題目の音が聞こえたと伝えられる。六三歳であつた。この日典の意志を継いで日良が二年後に来島。時氏に近づくなど、活発な布教活動に時氏も法華宗に帰依、改宗が許可され、種子島全島が法華宗に改宗した。種子島に初めて法華寺が設立されたのは、本源寺で文明元年（一四六九）である。日典が種子島法華宗の始祖である。

第五節 移 住

鞍勇は甌島からの移住者で作られた集落である。明治十九年（一八八六）四月に移住が始まり、大変な苦労や困難を乗り越え現在の豊かな生活がある。

『西之表市の伝説』によれば、鞍勇の地名は大山崎とか正泉坊というのが元の名であるが、牧瀬伝吉（もと東町出身、村議、鞍勇草分けの主）の葬式に柳田道彦神主が来て、道が悪くて馬の鞍が激しく揺れたから鞍勇とつけたという。もとは「くらしいさみ」だったが現在は「くらざみ」と呼ぶ。鞍勇は甌島からの移住者が多い。この付近はほとんど石寺塩屋牧だったことから、県が石寺から土地を買って集落を作ったはずだが、石寺の古老たちに聞くと土地は牧瀬伝吉・牧瀬権右衛門親子に売ったという。最初は最小限度の土地を県が買い、後で牧瀬家が広い土地を買って集落



甌島移住記念碑

民に分けて売ったともいう。そしてその値段は特別に安かったという。また、鞍勇からは種子島初の国会

議員、有馬輝武が出ている。

大正二年（一九一三）に移住記念碑が建てられた。碑文（漢文）を和文で記す。

明治十七年の夏、初めて甌島よりこの地に移る。戸わづかに七、炊飯稀少、艱苦相次ぐ、しかして貧に堪ふること数年、もっぱら農業を努め、かたはら薪炭を市に販り、勉焉として怠らず。つひに生計を全うす。日清日露の役に軍人中野周右衛門等を出だし、漸く世人に伍するを得たり。さいはいにたまたま、地を替へて移居する者あり、今戸数十有八に及び、おのおのの畑山林数十町歩を有す。他日有望の地たること期すべし。

大正二年三月建 鞍勇町

昭和六十一年（一九八六）に移住一〇〇周年を迎え、記念碑が建てられた。鞍勇集落グラウンドの少し高い所に建っている。その碑文は次のとおりである。

わが村は、明治十九年（一八八六）薩摩郡甌島より、打続く自然災害を逃れ、新天地を求めて、此の地鞍勇に、農業を生計とする七戸の先駆者達に依って開拓の鋤が下され、安住の地として誕生、以来各地より移り住む人も多くその間、国、県、郡、村（町・市）の方々の温情と援助に育まれ、先駆者達の艱難辛苦の結晶と先輩達の遺業継承に依って、今日、戸数四七戸、人口一四九名の隆昌を見るに至る。昭和二十年を節目として回顧するに、昭和十九年第

二次世界大戦に於て、尊き生命を国に捧げられた、下江清美、成清道德、山口政雄三氏の冥福を祈り、昭和三十年衆議院選挙に於て、吾村より立候補された、有馬輝武氏が種子島初の国会議員として当選、村民一同の誇りとし励みとなる。昭和三十二年度、後進村の代名詞、陸の孤島とまで云われた吾が村に、入植七十一年目にして久しく待望の文化の灯が点る。此の日村民の感激も一入今だに忘れ得ず、これより家庭電化が進み、いつしか聞き馴れし陸の孤島と云う言の葉もうすれ、文化生活への途が開かれた。昭和四十三年度、公民館老朽化に依る建替え、昭和五十五年度には陳情により四年間に亘る正泉坊農道改良舗装工事が完成。昭和五十九年度、市道下西・古田線の舗装完通と道路網の整備に伴い、百周年記念事業の一環として、篤志家の用地寄贈に依り、昭和五十八年度、運動公園の拡張（建案後三年目）。昭和六十年度には長年の懸案であった共同墓苑の建設（提案後十年目）等と村民一同の力を結集して、集の場を設け産業経済発展の道とし、憩の場とし、先祖の靈を祭る場として事業を進め、遅々として脱却することの出来なかつた後進性から一步前進の感あり。ここに百周年を迎えるに当り先駆者、先輩達の労苦を偲び、関与された全ての方々に対して衷心より感謝の意を捧げると共に、先駆者達の遺業を継承して、村の限りなき発展と平和のために努力することを誓い、百周年を記念すべくこの碑を建つ。

昭和六十一年十月吉日
（二九八六） 村民一同建
碑



創設百周年記念之碑

第六節 戦争と疎開

下西の学童疎開

昭和二十年（一九四五）、太平洋戦争は日本にとって非常に不利な状況でアメリカ軍が種子島に上陸するとまで言われていた。三月十八日の種子島初空襲以来、西之表は連日のように空襲を受けるようになった。種子島の人々は子どもたちを安全な場所に逃そうと、島内の国民学校の二年生から六年生までの児童を鹿児島本土へ疎開させることを決めた。四月二十四日、この日もアメリカ軍による池田地区への空襲があった。下西小学校作成の資料「下西研究」には、次のように記載されている。

疎開する下西国民学校の子どもたちは午後六時までに日典寺に集合、まだ燃え続けている町を通り、リュックサックを背負って港まで歩いた。下西国民学校の子どもたちが乗ったのは「八重岳丸」という二〇〇〜三〇〇トくらいの小さい船で、夜一〇時頃に出航し一〇時間ほどかけて鹿児島港に着いた。それから子どもたちは鹿児島駅から汽車に乗った。汽車は空襲にあうとトンネルの中に止まり、敵の飛行機がいなくなると走った。下西国民学校の子どもたちは大口の山野という所で集団生活をした。疎開先では、とにかく食べ物がなく、皆ひもじい思いをしたそうである。疎開先での生活が続く中、子どもたちは食糧不足のため体

力を失っていった。さらに疎開児童の間に赤痢という恐ろしい伝染病が流行した。病気にかかっても薬もなく、二人の子どもが、親元から遠く離れた土地で幼い命を落とすという悲劇も起こった。八月十五日、日本はアメリカなどの連合国に降伏し、長く苦しかった戦争が終わった。しかし、疎開児童が種子島の家族の元に帰れたのは、それから一ヵ月半も後の十月一日のことだった。

戦争体験談

鉄砲館特別展『戦後七〇年展 記憶と失のう前に聞かしようい』に、向田マシエ氏の戦争の体験談が展示された。内容は次のとおりである。

当時の様子

壱泊集落は日本軍の無線塔（種子島合同庁舎付近）と西之表市街地の間に位置していました。敵機は無線塔を爆撃し、次の攻撃目標である市街地へ向けて壱泊上空を通りまします。その音の凄まじさは、防空壕の中にも恐ろしく感じました。また、壱泊から鴨女町にかけての海岸には多数の兵士の遺体流れ着きました。海岸には、おびただしい数の遺体が並んでおり、身元が判明する人はまれだったようです。妹をおんぶしたまま歩いていて遺体に引っかけたり転んでしまったこともあります。自警団の人たちが遺体を運んで、若狭公園の上の方で火葬をしていました。

つらい経験

私は足の骨髄炎にかかり、医者に診てもらいましたが、道具も薬も全く無かったため治療ができず、三年経ったら歩けなくなるだろうと言われていました。その後、医者は兵隊と一緒に駆り出され、西之表には医者がいない日々が続きました。戦争が激しくなるにつれ、学校に行けない、病院はない（医者がいない）、着るものさえない、本当につらい経験をしました。私の父も出兵し戦死しました。父の遺骨を佐世保に迎えに行かねばならなかったとき、私はよそに着ていく服がありませんでした。そのため配給の時、「今度の配給品は靴も服も全部マシエにやろう」と友達や先生がほとんど譲ってくれました。その時のみんなの優しさが本当にうれしかったです。

終戦を迎えて

「戦争は終わった」という話は伝え聞きました。最初は「嘘だろう、ただの噂」とみんな言っていました。敵機が来なくなったことでしょうか。事実だと理解した時、みんなで大泣きました。戦後一番の喜びは学校が再開したことです。榕城小学校の敷地内に中学校を臨時で仮設し再開されました。私の足は骨髄炎のためますます悪くなり、漕泊から通学することが困難でした。しかし、先生が「這ってでも来い」と励ましてくれ、がんばって通学しました。足の骨髄炎も、復員してきた軍医の医師のもと

手術を施してくれました。戦後初の種子島での手術だったようです。医者はレントゲンも見ず見事成功させました。おかげで今では普通に歩けるようになりました。戦争は、戦地で戦っていた兵隊さんだけでなく、家に残った者もみんなが苦しいものでした。戦争で辛い思いをするのはどこでもみんな同じです。だから、戦後はみんなで助け合い、優しさを分けあって生きてきました。戦争を知らない世代へ、そのことを理解してほしいと願います。優しさを大切に、友達、家族を大事にしてください。

空襲の様子

下西小学校に残された下西国民学校日誌に、空襲の様子等が書かれているので、引用する。

- 昭和二十年三月十八日 午前三時頃、空襲警報発令。児童登校停止。本島初空襲を受く。殆ど終日の空襲なり。
- 米軍機、午後一時より午後四時までグラマン戦闘機一二機が来襲。増田飛行場・西之表市街地を主目標とし、住宅六十二棟・非住宅二三棟が焼失。市民の死亡三三、負傷、行方不明一三。軍人の死亡三、負傷一〇、行方不明四。
- 四月十九日 空襲一〇時三〇分より二回にわたり来襲せり。校舎一部に機銃を受ける。
- 四月二十四日 一三時三〇分頃敵機来襲。敵機一機、初の時限爆弾使用。米軍機B24焼夷弾攻撃、池田大空襲。

西町一部炎焼。疎開児童今夜無事出発。

○四月二十六日 六時三〇分より一〇時三〇分まで敵機来襲、爆弾投下。

○四月二十八日 七時三〇分頃敵機来襲爆弾投下。

○五月三日 午後より敵機（B29）本島を偵察して南下する。

○五月十三日 空襲警報（八機）機銃を受けるも被害なし。グラマン戦闘機八機、浦田・伊関・安納・市街地を銃爆撃、死者四名。

○五月十四日 警報発令の為児童は出校せず。午前中敵機九機の来襲を見る。西之表・遼泊機銃を受けるも被害なし。

○四月から五月にかけて、本土から続々といわゆる種子島兵団の兵隊が渡って来た。兵隊たちは殆ど三〇歳以上、四五歳位の老兵であり、兵庫・大阪・京都・滋賀方面からの招集兵で、下士官将校以外は殆ど未教育であった。

○六月十五日 一時三〇分頃敵機北上南下せり。西之表では小型機八機、現和国民学校を銃撃、児童を避難させていた木原平五郎先生が殉職された。

○六月、種子島独立混成一〇一〇九部隊（部隊長千田中将）一二〇〇〇名、古田の中割地区に駐屯。町民を動員して、同鍋割地区に陣地の構築始まる。

○七月十日 一二時敵機来襲により、学校機銃掃射を受く。

約一五〇発弾痕。

○七月十二日 一八時三〇分頃、馬毛島銃爆撃を受く。

○七月十四日 一四時三〇分頃、敵機約二〇機西之表町の海岸付近を銃撃。大型機で市街地爆撃、住家六〇棟全半壊。

○七月十五日 午前九時半より午後一時頃まで、敵機来襲して町を空爆。

○七月二十五日 爆撃に会い、校舎の一部破損せり。付近の馬一頭と学校裏手に避難した兵隊が爆死。

○七月二十七日 残留兵員全部民家分宿人、四月十五日以来三ヶ月有、寝食を共にせし校舎、住宅より兵員の姿消える。

○七月二十八日 終日爆音の絶え間なし。西之表・州之崎・上之原に投爆。

○八月十五日 停戦協定成立発表。これまで連日のように繰り返された空爆で西之表全焼全壊二六〇余軒。

第七節 人物

西ノ海嘉治郎(二代)

ベースボール・マガジン社『大相撲名門列伝シリーズ(五)時津風部屋』に次のように記載されている。

一八八〇年に鹿児島県で農業と木挽きを営む家の二男として生まれる。一五歳で既に「島一番の大男」と言われるまで成長したことから、近所の人に角界入りを勧められるが父親が反対していたところへ、巡業に来た井筒(初代西ノ海という説もある)から熱心に勧誘されて入門した。一九〇〇年一月場所で初土俵を踏む。四股名は出身地に因んで「種子ヶ島」とした。

入門時から有望視されたので序二段ながら幕下の申し合いに加わったものの、抵抗を見せずに軽く捻られたことが井筒の逆鱗に触れて足腰が立たなくなるまで青竹で打ちのめされた。堪らずに脱走して東京駅で鹿児島方面の列車を待つ間に発見されて連れ戻されたが、井筒からも反省の言葉と金一封をくれたので、以後の稽古ではさらに身が入って強味を増した。一回の改名を経て、一九〇六年五月場所で「錦洋与三郎」として新入幕を果たす。

一九〇八年十一月に師匠の八代井筒が死去したことに伴い、関脇だった一九〇九年六月場所より四股名を西之海灘

右工門へ改名し、同時

期に二枚鑑札で九代目

井筒を襲名した。一九

一〇年一月場所で大関

へ昇進した。一九一二

年一月場所八日目、当

時四三連勝中だった太

刀山峯右工門を叩き込

みで破った。太刀山峯

右工門はこの後五六連

勝を記録したため、こ

の敗戦がなければ一〇

〇連勝が達成されていたかもしれないと言われている。こ

の敗戦には太刀山は晩年までかなり拘りを見せていたよう

で、廃業後はこの一番について八百長を仄めかす発言をし

ている。ただし、この連勝中には休場も含まれている。大

関在位中の一九一四年一月場所より二代西ノ海嘉治郎を襲

名した。一九一六年一月場所は八勝一分一休の土つかずで

史上最高齢での初優勝を果たし、翌月になって吉田司家か

ら横綱免許を授与された。しかし、この時ですでに晩年期

に当たっており、在位五場所皆勤は新横綱だった一九一

六年五月場所のみに終わっている。全盛期には鳳谷五郎と

熱戦を繰り返していたが、一九一八年五月場所限りで現役



西ノ海嘉治郎

引退。

日典寺境内の一角に牧瀬家の墓があり、横綱西ノ海嘉治郎の
 拝み墓がある。横綱は川迎の出身で名前を牧瀬休八という。

榎本小右衛門

榎本小右衛門は池野の人で、昭和十一年（一九三六）から昭和二十一年までの一〇年間西之表町長を務めた。西之表市役所
 駐車場付近に建っている銅像の碑文を引用する。

榎本小右衛門は明治十八年三月二十九日下西池野に生ま
 る 梶立川辺中学校より陸軍士官学校へ進み 陸軍砲兵中
 佐に任じ 国防警備第一線の指揮にあたる 昭和四年（四
 十四歳）帰郷 農業に従事するかたわら種子島酪農組合長
 在郷軍人会熊本郡連合分会長などを歴任 昭和十一年八月
 より昭和二十一年六月まで 西之表町長に就任。時は戦時
 体制下の金融恐慌時代 自らの給料を返納するなど率先し
 て手本を示し財政再建の達成に尽力す 氏は郷土の発展の
 基を農におき 心を常に民とともにあることを政治理念と
 し華美をさげ質素を重んじるその人柄とその政治姿勢はカ
 ンザー（みちしばで編んだ背負袋）を背負い登庁する姿に
 象徴され「カンザー町長」として広く親しまれた アヤ夫
 人との間に三男五女を授かる ここに氏の遺徳を永久に顕
 彰するため 市民の浄財により 銅像を建立す

平成十一年七月吉日

遠藤 清

遠藤清は川迎に、遠藤七郎の二男として生まれた。二二歳の
 頃、京都の大日本武徳会武道専門学校へ入学。昭和五年、二七
 歳の時卒業。技量・学業ともに抜群であったことから優秀賞を
 うけた。さらに母校の懇請により、学校にとどまり助手として
 勤める傍ら、専攻科に学び卒業した。助教を経て教授に栄進、
 さらに八段に昇段。範士となり武道家として確固たる地位を築
 いた。この後二十余年にわたる長い間、指導に当たり、その間、
 数次の試合において花々しく活躍した。全国東西対抗の大会に
 は、主将又は副主将として出場した。昭和二十五年に「気分が
 悪い」と病院に行つて入院、まもなく急逝した。四七歳だった。
 わかさ公園にある頌徳碑の碑文は次のとおりである。

遠藤清先生ハ明治三十六年西之表川迎ニ生ル。長ジテ鹿見
 島師範学校ヲ経テ大日本武徳会武道専門学校ニ学ビ昭和五
 年卒業要メニ因リテ母校ニ留リ教授ニ累進ス。兼ネテ京都
 府柔道師範タリ技能拔群人格円満人ニ接スルヤ誠實徳望斯
 界ヲ蓋ヒ熱心子弟ヲ育スル二十一年ニ及ブ濟々タル多士其
 ノ門下ヨリ出ヅ典型的柔道人ト謂フベシ惜シイ哉昭和二十
 五年京都ニ病歿ス時ニ四十七歳茲ニ其ノ徳ヲ讃ヘ後世ニ伝
 ヘンガ為ニ廣ク特志人士ノ協賛ヲ得テ之ヲ勒ス

昭和三十一年十一月十八日 熊毛郡柔道会 西之表町

牧瀬傳吉

牧瀬傳吉は鞍勇集落の開祖と伝わる。傳吉は明治二十四年（一八九二）に石寺牧地を数十町歩購入し、開墾して桑畑をつくったという。北種子村村会議員をしていたが三三歳で亡くなった。父権右衛門が建立した石碑はグラウンドの少し高い所にある。その碑文は次のとおりである。

（正面）明治廿四年養蚕ノ為大山寄開墾ス 牧瀬傳吉紀念

碑 全廿八年九月歿行年三十三才 牧瀬権右工門建

（裏面）自権右衛門経傳吉良助至静雄三代住大山崎之地斯碑所在其正面之側者也今静雄帰住西之表因移斯碑於此 昭

和四十年一月十九日 牧瀬静雄



牧瀬傳吉紀念碑

第八節 年中行事

若水汲み

昔は日本全国どこでも行われていたが、水道の普及とともになくなりつつある。場所により時間、汲み方、唱え文句が違い、自分の家の井戸、共同井戸の違い、釣瓶で汲む井戸とバケツで汲む井戸の違いなどがある。米を紙に少し包んで井戸に置き、塩と焼酎で祀ってからタンゴに杓で唱えながら水を汲んで、こぼさないように持って帰り、この水で顔を洗い、お茶を沸かして飲み、ご飯を炊いて一年の健康を祈る行事である。下石寺の唱え文句は、「年若男が、年の初めに、水汲み始める、黄金汲む、黄金汲む。」である。

年始会

どこの集落でも元旦は早朝に神社又は寺などに皆が集まって新年を寿ぐ会がある。上石寺では年始会で「めでた節」と「高砂」がうたわれていた。昭和二十年代まで行われていたが、いつ頃なくなっただかは明らかでない。また、数え年一五歳となった男の子たちは、代表の親が男の子たちが一五歳となったことを報告して「ちよう入り」の儀式を行い、大人の仲間入りをした。現在も正月は神社参拝に行くが、昔は下西小学校の拝賀式に行き、大人たちは帰りに川迎で酒を飲んで回るものであった。

白起こし

二日一番鶏が鳴く頃、若い青年（数え年で一五歳以上）が三人くらいで各家を回り白起こしをした。小さい集落では小学生も参加していたという。土間にある臼に米を入れ杵で米をザクツと一回つき、臼のふちを杵で一回つく、これを三回やって終わる。この時の唱えは集落により違うが、上石寺の場合は「年の初めに年新たまつて米搗き始め申す、東こうさが峰に立ちたる高砂の、尾上の松で白切つてその枝々で杵切つて、唐の鳥と日本の鳥と、鳥と鳥と飛び交わさぬうちに、まざまざの米をつき始め申す。」である。これは米の予祝の一つである。

福祭文

正月七日、昔は全島的に行われていたが、現在は市内では十余集落になつてゐる。下西では川迎・上石寺・下石寺では現在も行つてゐる。歌詞は集落ごとに違つてゐる。いつ頃始まつたものかわからないが、中世の末頃、本土の門付け芸人のうたの影響下で種子島で生まれたものではないかと言われている。福祭文は一家の安泰と豊年を、歳神に祈り祝う行事である。羽生道潔は『種子島年中行事』で「正月七日、福財ものとして下部の者共、五々七人組み合い諸家の門を数えて廻りて、其の家の福貴栄える呪文を同音高声に謡うようのもあり、惣じて往古神代よりの倣しならんか。」と記している。

船祝い

正月二日、遼泊では船祝いが行われていた。下西小学校教員の西田哲郎氏作成の資料「下西研究」によれば、この日午前中漁師は、船にお供えの塩・米・お神酒を持って行き、船の神様に一年の安全と豊漁を祈る。昼二時頃からは公民館で船祝いが始まる。これは浦祝いでもあるといい、浦人はみんな集まる。船主が船からおろして持ち寄つたオコワ・御神酒・素なますやスズリブタを出す。昔はベンザシ宅で行われた。昔はベンザシ宅で船大工を中心にしてみんな座につく。吸い物が出て祝い歌「年のはじめ」を斉唱する。そしてお神酒がまわされ、吸物を取り「綱ざらえ」を歌う。しばらく酒を酌み交わしてから正座して「樽歌」を歌う。以後、スズリブタを肴にして酒宴が続く。漁業をする人たちは、船祝いをして、一年の豊漁と幸福を祈る。現在は行われていない。

日典寺の国禱会（温座祈念）

日典寺では、一月十一日夕刻から十三日朝まで、島の平安を願ひ祈禱が行われる。この行事を「国禱会」又は「温座祈念」、「読み明かし」と呼ぶ。国禱会には全島から僧侶が集まり、一般の人たちも多く参加する。僧侶たちが代わる代わる祈禱を行い、座を温め続けるので温座祈念と言う。国禱会は、戦国時代の天正十三年（一五八五）、九州の戦場にあつた一六代島主種子島久時の無事を願つて祈禱が行われたことに由来するといわ

れる。十三日の明け方参詣者の方々にお経頂戴の儀式をして家内安全を祈念する。そして国持会で頂いたお札・お洗米を大切に持ち帰る。国持会は本源寺でも行われ、本市の無形民俗文化財に指定されている。

蚕の宮じょう

一月十四日、全島的に蚕この宮みやじょうが行われる。昔は青年、高校生、中学生に小学生が一緒に行っていたが、現在は多くの地域が小学生と保護者で行っているようである。その歌詞や節は地域によって異なっている。下西では池野・川迎・漣泊・上石寺で現在も行われている。当日についた餅を伸ばして四角に切り、コノミヤジヨウの木（エゴノキ）にさして門木、床の間や亭主柱などに飾っておく。餅の数は必ず奇数である。門木にさしておいた餅は、回って来た子どもたちが歌ったあとにもらうて行く。蚕の宮じょうは養蚕の予祝であるが、南種子では舞いがつくので「かーごまー」という。この「かーごまー」は北薩などにある「穂垂れ引き」と似ている。蚕の宮じょうは全国にある「春駒」と歌詞も似ている。国上では「やーらひき」と言ったという。歌い出しが「やーらやーら」から始まるからで、これは国上のほか、下西の石寺、住吉の能野も同じである。他の地域はこの歌い出しではない。

穂垂れ引き

一月十四日、蚕の宮じょうの餅を蒸す時、コシキから出る湯気に一家の主人が用意した茅の束をその湯気に当て、山ビワの木の太い箸でしごいて、唱えながら茅の束を濡らす。次に臼の上にバラを乗せ、中にスクボを入れ、先に濡らした茅に当てる。いかにも稲が実ったように見える。このときも唱え文句がある。これも米の予祝である。唱え文句は人によって異なるが、「米の穂はブーラブラ、粟の穂もブーラブラ、唐芋はゴートゴト」というところが多い。

破魔祈禱

一月十八日、上石寺の八幡様で破魔祈禱が行われる。破魔は悪魔退散病気災難などの除災と招福を祈願するものである。当日は法華僧の司祭である管理会長と当人の二人で執り行われる。洗米・豆・塩・餅・里芋をお敷にのせて持つて行き、石塔の前の台座に供えて祈願祭を行う。その後集落保存の鉄の輪（チンチヨ



上石寺の破魔祈禱

ウの輪)を「ハマー」と言って一人ずつ転がす。現在は的と弓矢を作って矢を射ている。この八幡様付近は射場と言って聖霊な場所であった。ここの南に「射場の山」と呼ばれる場所があった。

六月 燈

旧暦六月に下西では各神社・寺で六月燈を行っている。この六月燈は鹿児島県独特のもので、昔薩摩の殿様がお寺に観音堂を建てたときに、たくさんの灯籠を作ったのが始まりだという。七月二十一日、川迎集落では日典寺の御廟所の周りを掃除し、灯籠を新しく張り替え、子どもたちが野菜・魚・人など思い思いの絵を描き、夕方に灯りをとます。参詣者はお神酒と洗米がもらえる。六月燈は五穀豊穰・家内安全を祈る行事である。川迎の祭りであるが、各集落長も参加するので下西区の六月燈でもある。

盆 行 事

法華宗の家では八月十三日は墓地の掃除をして精霊様を迎える日である。十四日・十五日は精進料理を作り、三度の食事を供える。昔はもつと多くの食事を出していた。そして家では魚や肉は食べないものであった。盆花はシキビとソーハギで、シキビはあのお世のお金である。十五日の夕方に精霊送りをする。精霊様が帰るときは、「百合の根」を一枚ずつはがして、これ

が舟になる。「マキ」は月桃で巻いた長い粽ちまきのことで、これが舟の櫓になるといふ。この「百合の根」と「マキ」を仏壇にあげる。

石塔まつり

下石寺集落の南部に大石様がある。このそばに集落の始祖という石と神社の守り神という石と石塔がある。八月十四日の精霊迎えのときに、この石塔にお参りしてから墓に行く。十五日夕方には墓に精霊を送ってからこの石塔にお参りし、白い真砂・シキビ・ソーハギ・水の子・マキを供え線香をあげる。この共同祖霊にお参りする儀式を「石塔まつり」といふ。

盆踊り(川迎)

川迎の盆踊りは白面のカムキという布を被って踊った。これは上西校区の横山同様、清浄な霊に人の息がかからないようにするためという。円陣の真ん中に笹竹を立て、これが精霊の依り代で、精霊を慰める祭りである。歌も踊りも穏やかで、先祖の霊を供養する盆踊り本来の姿である。旧暦の七月二十一日は、日典上人の命日でこの日に、日典御廟前・本源寺・栖林神社の順で踊るものだった。昭和初期に踊られた後消滅し、現在は伝承者もない。上西校区の「横山盆踊り」は国の無形民俗文化財に選定されている。

願成就

旧曆九月に各地で願成就が行われる。春に集落の氏神に作物の収穫と人々の幸せの願かけをする。秋になるとその願いが叶ったことに感謝しお祝いをするが、これが願成就である。池野集落では十月二十一日、池野神社でほいどんにより神事が行われ、七〇歳以上の高齢者を招いて盛大に敬老会が行われる。ほかの集落でも敬老会や運動会が行われる。

城ノ浜ふるさと夏祭り

下西校区が主催して日典寺下の浜で毎年八月に盛大に開催されている。各集落が一つ以上の演目を出し、見物客が校区外からも来て賑やかである。夜は花火もある。本市の広報紙『市政の窓』では、次のような記事を掲載した。

令和四年三月、優良地域づくり団体として、下西校区夏まつり実行委員会が表彰された。これは地域の活性化等を目的に、市区長会からの推薦に基づいて行われたものである。同委員会は、毎年夏まつりを開催し、校区民の交流と地域への愛着を深め、連帯意識の高揚に貢献。昨年はコロナ禍の影響により、夏まつりの開催はできなかったものの、下西小学校児童の願い短冊をのせた「願い玉」を含めた花火を打ち上げるなど、工夫をこらした開催方法に取り組みました。

歳どん(鞍馬)

もともとは甌島の行事である。父親が年取りの夜(大晦日)、幼児のいる家庭で今夜歳どんが現れることを知らせる。「歳どんは空からお前の一年間の言動を見ているから決して「ウソ」を言うな。歳どんの言うことには正直に答えなければならぬ」と教える。幼児が半信半疑のまま神妙に待っていると、異様な物音と一陣の風をまいて、恐ろしい異形の風態をした歳どんが現れ、大声で名前を呼ぶ。眠気のある幼児は気が動転して歳どんの前に這いつくばる。歳どんは的確にその子の良い事、悪い事を教えあげて様々な注意と教訓を与える。その後後ろ向きにさせ、背中にドンと大きな餅を背負わせて去る。お年玉である。

現在は児童の減少もあり、行われていない。



歳どん (中原康信氏提供)

ゴロンゴーチ

石寺川の田浦をゴロンゴーチという。石寺は大崎塩屋から五郎右衛門という人が来て塩焚きを始めた。石寺川は五郎川とも呼ばれていたと伝わる。五郎右衛門は石寺の人たちに、新田開発を指導したため、石寺川の田浦を「五郎の耕地」という意味でゴロンゴーチという説もある。

ゴロン大路

鹽泊から石寺に行く旧道（国道を新道という）が縁起の悪い場所といわれた。ソージバロといたり、ゴロン大路と呼ばれる所であった。その大路の西に若宮の平という所があり、種子島の若殿を斬り殺したという伝承がある。この若殿は、『西之表市の伝説』にも記載がある野辺盛純のことで城ノ浜で死亡したと伝わっている。しかし盛純は実際は石寺まで逃げて来て死亡したという説もある。その場所がどこかわからないが、途中にイサコウバ（諍う場）という所がある。よくない所は旧道ばかりではなく新道のほうも多い。夜中自転車で通りかかった人は、誰かがどんちゃん騒ぎをしていたので、ここは松山のはずだが、とそばに寄ると先へ先へと逃げていくという。また、小学校の上級生二人が腰を下ろして休んでいたら、一五〇メートル

い向こうから黒装束の男が人力車を引いて走って来た。映画では見るが今時人力車がいるのかと、見ていたら五〇メートル先でさつと向きを変え、三メートルの崖を垂直に駆け上がった。びっくりしていたら馬車が来たので後をついて行き、その場所を確かめたが車の上がった形跡はなかったという。

ガランをキリキリ廻る話

『西之表市の伝説』によると、下西小学校のすぐ北脇の一角は、もとはガランといってお寺の築山があった。そばに川があるが妙泉寺川という。昔妙泉寺があった場所だが廃仏毀釈の際になくなった。このガランに新造という人が魚を一匹下げて山を行ったり来たりしていた。「新造はまあ不思議な何をすんどうか」と思ったので「新造どん」と声をかけたら「私はどうも道に迷うて出られん、そいで廻っており申す」と答えた。すぐ下に道はあった。「それでは私が連れて行って上げよう」と言って家まで連れて行った。この頃はまだ寺があったという。持っていた魚になにか憑いたのじゃなかるうか。生魚を持ち歩く時は目に塩をつけるものだという。

ヌリヨメジヨウとメン

ヌリヨメジヨウが出たという話が伝わるのは、字松元と黒石平である。石寺川のそばだがここに娘たち数人がベーラ（枯れた小枝）を取りに行った際に出会ったという。着物を着ていて

顔はわからないらしい。松元ではこっちに来いと手招きしたらしいと伝わっている。

榊木小田の話

上石寺の昔の公民館の東北方向を榊木小田という。この近くの老婦人が一人でタケノコを採りに行った。少し入ってひよいと前を見るとまあ立派な神社が建っていた。ここにこんな神社はないはずだと思ったが、それから二時間どこをどう歩いたか全く覚えていない。気が付いたのは茶屋平（現在の徳電器のそば）だが、榊木小田の反対の山の方から歩いて来ていた。榊木小田からは三〇〇メートルは離れている。近くにいた人に家まで連れて行ってもらったと伝わる。

御前山と八幡様

川迎に御前山という所がある。木を伐ったりすれば祟るといわれた。小さい頃ほかで通るものだった。入佐字になっており、区の山である。『西之表市の伝説』によると、大きいたぶの木の根元に八幡様を祀ってあった。イバといつて庭も作ってあった。

現在は日典寺境内に移して祀っている。この御前山と下にある上之河はガローといわれる。ここを流れる荒蒔田川（安徳川）では「かわうそ」と思われる生物の目撃例がある。この川には「ビッチョウ」や「ツ克蘭ピョウ」が多く、橋の三〇メートルほど

上流には小魚を食べた跡があったという。また、ここでは夜に大木が断末魔のあがきでドーンと倒れるものすごい大きな音がする「天狗あらし」もある。

ガロー

湧水池や川は生き物にとって欠くことのできないもので、そこを汚さないようにその恵みに感謝し聖地として大切に、汚すと祟りがあるという場所がガローと呼ばれる。下西には、①上石寺のゴロンゴーチ、②上石寺の黒石平、③壱泊の上之河、④壱泊の白水原、⑤川迎の御前山、⑥川迎の妙泉寺跡がある。

箱崎と樋ヶ崎

壱泊新港の先の端に箱崎のシンボルの目立つ岩がある。天狗の烏帽子岩とかイルカ岩、たつ石などと呼ばれるが、壱泊の古老からは火立^{ほた}て岩と聞いた。昔は壱泊と馬毛島の連絡にここで火を焚いていたというからうなずける名前だ。現在の種子島警察署から海岸に下りた場所も箱崎というから広い。樋ヶ崎は石寺塩屋牧の北の端であり、『種子島家譜』にも登場する地名である。

種子島警察署の西方は字古牧である。昔の石寺の牧場の跡であらう。この畑で仕事をしていた古老は、ここには一メートルほどの穴がいくつもあったという。

大瀬の岡

上石寺の神社下は高瀬があり広い草原だった。高瀬の南側に港があり、沖には有名な大瀬がある。ここを大瀬の岡といい、上石寺の始まった場所である。ここには上石寺の開祖五郎右衛門が作ったであろう、塩釜跡や石灰を作った灰釜跡もある。また、ここで塩作りをしていた大瀬道広は、日向の生まれという説もあるが、二〇歳の時には無双流武芸を日向より来島の佐藤兵衛に学び、皆伝を得ている。この後瀬泊に移住して、栖林公に認められ兵器卒長となり姓を大瀬と賜っている。『種子屋久先賢伝』には、万治二年（一六五九）上石寺の生まれとある。

石寺浜の砂鉄

種子島の砂の中には砂鉄が多く含まれ、石寺浜の砂浜も真っ黒だった。この上のあたりを黒石平という。この石寺海岸で昭和三十二年（一九五七）十一月から東邦金属株式会社が砂鉄の採取を始めた。海岸の砂丘を崩し、パイプで濾過しながら砂鉄を集めていたが、同四十年には終了した。小規模な砂鉄採りはその前から行っていた。

カゲの道

女性は昔、月経の際にはカゲの小屋に行って、縫い針などをして、その期間が終了してから正業についた。上石寺の砂鉄採取場の手前から海に出る小道があるが、そこを「カゲの道」と

いう。このカゲの道の下は広い草原だ。昭和十九年二月には陸軍輸送船である「りま丸」が轟沈され、遺体が種子島に漂着した。カゲの小屋下の海岸にも一〇体近く漂着した。大人二人が泳いでいき引き揚げしていた。

最初の甘藷栽培

一九代島主種子島久基

は、甘藷に関心を持ち、琉球から一籠の寄贈を受け、西村時乗に栽培の研究を命じた。時乗は石寺の大瀬休左衛門に命じて作らせた。当初は蔓に実がなると思ってたが、実がならないので引っこ抜いたところ、初めて土中になることがわかったという。休左衛門が最初に甘藷を試植した畑は、現在大瀬正夫氏の家が建っている場所だという。

メン（妖怪）は煙草がすかん

現在の種子島警察署付近のたんぼは深く、急こう配だった。柵などはなかったため、ここを通る人がメンによく道下に引きずり落されたという。そういうときはゆっくりと煙草をすえば



カゲの道



池野小川家の田の神様像

よい、メンは煙草がすかんから悪さをされないといわれた。

田の神山

市内各地に田の神を祀った場所がいくつもある。下西には池野と川迎の境にある「うつくしが峯」に田の神様があつた。ここには昔、種子島には一体しかない石像型の田の神様像があつた。現在のはわかさゴルフ場に移転・保管されている。上石寺にも「すくぼが峯」に自然石を祀った田の神山があつたが、現在は自然石もなく、祀られていない。

第一〇節 史跡・神社仏閣

王之山祠堂記（漣泊）

漣泊にある安徳帝を祀る王之山神社には、鳥居のそばに前田豊山筆の「王之山祠堂記」と記した石碑がある。碑文は漢文であるが、読み下したものが『種子島碑文集』第一集に掲載されているので引用する。

王之山はあまじま漣泊浦の北に在り、樹木鬱然、中に一小祠あり。祠堂、方六尺、鏡六枚及び鉾一口を蔵す、その鏡、大なるものは径各三寸八分、小なるものは径各二寸五分、その鉾は長さ九寸一分、けだし数百年前の物、古色掬すべし、明治二十七年七月、盗あり、鏡を奪ふ。里人、搜索すれども獲ず。よつて工に命じて擬作せしめ以て蔵す。圭田六畝二十三歩あり。里人の共有地と称す。しかして祭祀及び祠堂修築の費、実に其の收穫に頼る、里中、べんざし弁指なる者あり。弁指は、なほ里長と曰ふが如し。里中の庶務を綜理し、又、祭祀の事を司る。毎歳、陰曆六月廿八日及び九月廿八日を以て祭る。祭るに酒ともち糕とを以てす。伝へ云ふ、安徳帝を祀るなりと。按ずるに、硫黄島三所大権現鎮座本紀に云ふ、平氏、安徳帝を奉じて西に奔る。源氏追撃す。平氏、戦敗る。衆相議して曰く、帝業傾覆して此に至る、退いて後図を為さんには如かずと。ここに於て余党、帝を奉じてひ

そかに鎮西に幸す。途に種子島を経、駐蹕すること旬余。時に島司大江、澄遐なる者あり、糧食を献す。帝、之を嘉賞し、左衛門大尉通正、右馬介季利をつかはして、大刀及び黄金を贈り、かつ澄遐に詔して武蔵守に任じ、以て翼戴を謀らしむ。澄遐、始めて其の帝たるを知り、感激してやまず、奏して曰く、臣、無似なりといへども、願はくは犬馬の力を効さん、然れども臣が同僚に淡路、三郎、沼津、藤太なる者あり、雄猜はかられず、あるいは不良を謀らん、駐蹕、ここに於てするは、おそらくは得策にあらず、もし、それ、糧米の徴発は、臣が力、弁すべし。あへて命を奉ぜずと。ここに於て帝、つひに渡海、硫黄島に達し、行宮を建てて以て居る。後、澄遐の子澄貞、はたして糧米を送り、供御、よつて乏しからざるを得たりと云ふ。蜆泊浦、あに、当時駐蹕の処にして、よつて以て王之山と名づくるか。かへりみるに帝のここに播遷するや、里人感喜、しかして深く其の蒙塵をいたむ。還蹕の後、哀惋思慕、倦々おかず、つひに祠を立てて以て愛敬の誠を致す。また人情のまさに然るべきところなり。然らずんば、すなはち絶海孤島の山、なんぞ名づくるに王の字を以てするあらんや。しかして鱗介の民、また何を以てひとり安德帝を蜆煙瘴雨の中に祀ることを、これ為さんや。王と皇と国音、相同じ。その安德帝を指すこと、山名、以て証すべし。鏡と銚と、けだし當時の遺物、また以て証となすべし。しかる後、口碑の我を

あざむかざるを知る。しかして鎮座本記、また以て信ずるに足る。ああ、帝、間閔流離、絶海の孤島に蒙塵し、つひに其の志を伸ぶること能はず、終天の恨、果していかなぞや。予、これを思ふごとに、感悚もごも至り、おぼえずも慨然として涙くだる。しかして里人の誠敬奉仕、以て今日に至る。その忠、また嘉みすべきなり。近日、里人、予に祠堂の記を作らんことを請ふ。あへて辞せず。口碑の由るところを叙し、以て後人に訖ぐ

租税完納顕彰碑（上石寺）

上石寺公民館の前に建っている。高さ二四〇センチ。公民館が新しく移ったので石碑も移設した。碑文は次のとおりである。

曾て田園荒れ、山林廢れ、炊煙立ちかぬることすらありしも、豊山先生の訓へによりて、部落民拳り立ち、ひたすら家業に
 励み、相
 倚りあい
 扶け、打
 続く台風
 早害にも
 めげず、
 撓まず、
 明治三十



租税完納顕彰碑

五年以来、今日に至る五十余年の久しきにわたり、相継ぎ相伝へて、よく租税の納期内完納の、歴史を打ち樹て、町民全般の納税思想の、普及昂揚に寄与せし、上石寺部落の偉業を、とこしへに讃へんとす。

昭和三十三年十一月 西之表町長 西村健夫

日本甘藷栽培初地之碑 (下石寺)

元禄十一年(一六九八)、一九代島主種子島久基は琉球の王様から唐芋を取り寄せ石寺の大瀬休左衛門に試作させ、休左衛門は苦心の末、栽培に成功した。下石寺神社の入り口(国道)にこの石碑が建っている。その碑文は次のとおりである。

本邦甘藷の栽培は実に我が種子島に創まり、種子島は我が下石寺を以て試作の地と為す。故に題して日本甘藷栽培初地之碑と曰ふ。初め栖林公、治を図るや、志、済民に在り、嘗て琉人より甘藷の利を聞き、折簡して之を求む。元禄十一年戊寅三月、中山王、尚貞一籠を贈る。公、大いに喜び、室老西村権右衛門時乗に命じて之を種多しむ。時乗、命を奉じ、我が下石寺、休左衛門をして試作せしむ。里人、其事を伝ふるのみならず、御家譜、之を証し、大日本農史、亦之を書す。休左、誠懇勤儉、于に栽し、于に培し、蕃殖して、其功、五穀に当る。歲月勿々、茲に二百三十年、其間、海内に広布し、民庶、其徳を仰がざるなし。我が下石寺の地たる、藁爾たる一小部落なりと雖、日本甘

藷の濫觴たるに想到せば、亦以て自重する所莫くんば非ず。即ち邑民相謀り、碑を建てて弗諼の意を表し、以て後昆に垂ると云爾。

昭和三年戊辰春四月吉日

下西小学校創立百周年記念碑 (川迎)

昭和五十五年四月十日に創立百周年記念式典が盛大に行われ、正門から少し入った所に石碑が建てられた。碑文は次のとおりである。

明治五年(一八七二)に旧日典寺跡に寺子屋的施設をつくり、十数名の子弟を集めて読み方、算術等を教授した。これが



下西小学校創立百周年記念碑



日本甘藷栽培初地之碑



日葡親交祈念之碑

本校の前身である。正式に濱松小学校と称して発足したのは明治十三年四月十日で、この日が創立記念日の所以でもある。以来今日まで校名改称、校地の移転や校舎の増改築、戦時中の学童疎開、戦後の学制改革等々、幾多の変遷を経て今日に至ったが、近年区民増の為再び隆盛期を迎えた。ここに創立百周年を迎えるに当たり、本校に学ぶ児童が益々発展する日本の将来を担う、立派な人材に成長することを祈念し、区民一同の願をこめてこの碑を建立した。

日葡親交祈念之碑（わかさ公園）

わかさ公園のほぼ中央の広場のそばに砲弾型の石碑が建っている。鉄砲の取り持つ縁で日本とポルトガルの親交を深める為に建立された。その碑文は漢文であるが、和文で記す。

泰西諸国の先づ我が邦と交通するものは葡国なり。その

商舶、平戸、長崎諸港に
来たり貿易
を営む。爾
来寛永鎖国
にいたるま
で約百年な
り。その我
が産業の開

発、文化の進歩をたすくるところ実に尠少ならず。しかし天文間、葡国船、始めて我が邦に来たるの時、先づ種子島に上る。その伝ふるところの銃器、また種子島を以て称せらる。故に日葡協会、今この地を選んで両国親交記念碑を建つと云ふ。

昭和二年十一月吉辰

八幡様

鎌倉時代以降八幡信仰が種子島に入り、各地に八幡様が祀られるようになった。祭神は応神天皇と神功皇后で、極めて靈力が強いとされる。それだけに守護神として崇められたという。上石寺の八幡様は氏神とも鎮

守の神様とも伝わっており、ここで破魔祈禱が行われる。「尚武の破魔」とも「ちんちよの破魔」ともいう。この八幡様の付近は射場と言って神聖な場所だったという。この南側に狭い田んぼがあり、その先の山を射場の山と言った。ここは平坦で広く吊るして置くのに丁度いい大石があった。この田は埋められ



川迎の八幡様



報徳之碑

て現在は射場の山とともに住宅地になっている。石塔は高さ二二八センチ、幅五四センチである。この石塔の前に石塔が左（一一七センチ）右（一一五センチ）に建っている。八幡様は川迎や下石寺にもある。

報徳之碑（上石寺）

報徳とは天地人三才の徳に報い、分度と推譲という考え方である。分度とは、自己の財産に応じて予算を立て、合理的な生活設計を行っていく。推譲とは、今日のを明日に譲り、今年のを来年に譲り、そのうえ子孫に譲り、他人にも譲るといふ行為を意味する。二宮尊徳の考え方もいわれる。この石碑は大正五年（一九一六）に建立された。報徳会が日本にできたのは明治三十八年である。これは資本主義の発展によって、動揺した農村共同体秩序を再編するための、地方改良運動の推進母体となったという。この石碑は、当初は寺口家の旧墓地内にあったが、昭和五十四年に上石寺共同墓地が移動した際、一緒に移し、現在の墓地の前に建っている。石碑は高さ一三二センチだが土台からだると二二〇センチになる。十二月初旬師走祈禱

の時に一緒に「報徳祭り」を行っている。種子島ではほかに報徳之碑も報徳祭りも行われているとは聞かない。

六 道

種子島の法華宗集落の各墓地に「六道」の石碑がある。各墓地の中央又は入口に建てられている。『下西小学校創立一〇〇周年記念誌しもし』によると、昭和二十三年頃までは各集落とも葬式の際、墓に行く途中必ずここに止まり「引導渡し」の儀式があった。現在は自宅で引導渡しの式を行い、埋葬の式を墓前で行うため、この儀式は行われていない。この「六道」は仏教の教えの中に出てくるものである。我々人間は「六道輪廻」といって、「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上」の間を廻り続けてその上上がることができない。そのためにこの六道の前で「悟道の教え」を授け仏の世界に到達するように「引導渡し」の儀式をする所である。ここで僧侶と位牌を持った喪主と霊屋を担いだ人だけが三回廻っていた。

虫供養之碑（上石寺）

虫供養の祭りは各地で四月から六月にかけて行われる。農業をすると多くの虫を殺す。そうした虫の霊を弔うのがこの祭りである。種子島には多くの集落に虫供養の石があった。三・四年に一度集落中が集まり、虫供養の祭りをした。これは虫だけでなく、牛馬など家畜や魚など、生き物を殺した供養の祭りである。

灰釜跡（上石寺）

上石寺神社下の大瀬の岡には灰釜跡がある。この灰釜は付近に多かった珊瑚石を焼いて石灰を作った釜である。珊瑚石がなくなつてからは馬毛島より丸木舟二艘で高瀬の横の港から上げて焼いていた。一回に二艘分焼いたという。三日間焼いて出した焼け石に水をかけ、一日置くと石灰になるといふ。焼いて冷ました石灰を置く灰小屋がすぐそばにあつた。

瀬風呂

瀬風呂は海岸の潮だまりに海水を入れ、海岸の石を焼いて投げ込みお湯にして入浴する風呂を指す。人々は米刈りなどで疲れた体を瀬風呂に菖蒲やヨモギを入れて癒していた。下石寺には昭和三十年代中頃まで使われていた瀬風呂が残っている。上石寺にも潮風呂跡が残っている。

馬頭観音（馬の神様）

三月から六月にかけて集落ごとに牧祭りをした。農耕は馬が主役であつたため、馬の健康と悪疫退散は農民にとって最大の関心事であつた。上石寺と下石寺は、製塩の薪炭用として山林と、これを運ぶ馬を飼う広大な牧を所有していた。上石寺の石碑はもともとは旧神社と同じウツチャイロにあつたが、令和元年（二〇一八）に神社前に移した。十二月初旬「牧祈祷」が行われる。もちろん下石寺にも塩釜神社境内に馬頭観音の石碑がある。

石敢當（湊泊）

道路の突き当たりには「石敢當」の三文字を刻している石碑がある。これは中国伝来のもので「魔除け」だといふ。種子島碑文集によると、本市に一〇基、中



日典寺の石敢當

種子町に五基、南種子町に三基となつている。市内では特に赤尾木城跡付近と納曽に多い。昔はもつと多かつたといふ。下西では湊泊に一基（二基とも）あつたといふので調査したところ、どういふ経緯か日典寺にあることが明らかとなつた。また、新しいものが池野にもあるが「石散當」となつている。

日典供養塔（川迎）

日典寺の下の浜にあり、日典殉難の場所である。日典五百遠忌を記念して新しく建て替えた。場所は同じ大長瀬の第一岩である。

（正面）南無妙法蓮華經



日典供養塔

本能寺日宏

(裏面) 昭和三十七年五月日典上人第五百遠忌記念建立之

日典寺永順代 発願主 大阪 林金房 岡本文平

磨家武重

日典上人誕生之地(川迎)

日典上人が生まれた川迎蔵野にある。川迎公民館の近くであり、東郷元帥の書によるものである。

(正面) 日典上人誕生之地 元帥海軍大将伯爵東郷平八郎

書

(裏面) 応永八年壬申十月十四日誕生 寛正第四未四月念

一本法色読化于榕城川迎 大正拾三年九月 下西

区民建立

正四位男爵種子島守時書

慰霊塔(川迎)

日典寺境内に第二次世界大戦の慰霊碑が建っている。碑文は次のとおりである。

世を挙げて動乱のさなかに投ぜし大東亜戦争に尊きみのちを捧げ給ひしますらを達五十五柱の御霊がやすらけく鎮りますことその血につながる者達をはじめとを同じうする下西校区民の総意をこめてここ風光絶妙の地にこの碑を建つ。

昭和三十二年

十一月十日 下

西区民一同建之

慰霊塔

(わかさ公園)

わかさ公園のほぼ中央の広場に高く大きく建っている。碑文は次のとおりである。

日清の役よりこのかた、度々のみいくさに、散華し給ひ

し西之表町出身、並ゆかりの人々の御霊を慰めまらせむ

ために、町民三万有余のまごころをこめて、ここ白砂青松

の地にこの碑を建つ。

昭和三十年十一月六日

建之

建之

日典上人霊蹟の碑(川迎)

日典寺境内にある。昔は下

から仰ぐように見上げていた

が、現在はここが埋め立てら

れて同じ高さになっている。

碑文は次のとおりである。

(正面) 身軽法重 日典



日典上人誕生之地の碑



日典上人霊蹟の碑

上人靈蹟 死身弘法

(裏面) 大正十年八月吉日 發起人 田代日生 山田日経
下西区民中

聖教塚(川迎)

川迎墓地にあった。日典上人を祈念して建てたものらしいが、詳しいことはわからない。ガルスが置かれ、ひとつ葉の木のそばに建っていたが、道路を広げる時に日典寺に移されたという。移転作業時に機械が止まったり、作業していた人の気分が悪くなったりしたと伝わる。

池野先祖累代顕彰碑

昭和二十八年に埋め立てられた池のそばにあった共有地の権者の顕彰碑と思われる。碑文は次のとおりである。

(正面) 池野先祖累代顕彰碑

(裏面) 鮫島新造 榎本小助 池野貞一 池野良吉 榎本

甚次 榎本三十郎 鎌田十郎 西村覚左衛門 桑

山五郎右衛門 桑山直道 上妻直一 鮫島矢吉

鮫島与助 長野直吉 鮫島新次 桑山五左衛門

榎本鉄丸

(右横) 建立 昭和六十年十月二十日 公民館建設記念

部落民一同

横綱西ノ海嘉次郎顕彰碑

日典寺境内にある。「種子島碑文集」第一集に碑文を読み下したものであるので引用する。

第廿三代横綱二代目西ノ海嘉治郎、本名ハ牧瀬休八、後東京市近藤家ノ養子ト為ル、明治十三年種子島川迎ニ生ル、廿歳ニシテ初代西ノ海ノ門ニ入ル、初メ星甲又錦洋ト称ス。当時ノ力士駒ケ嶽ト共ニ、常陸山並ニ逆鋒ノ薰陶ヲ受ケ、多年其ノ両翼トナリテ孤塁ヲ守リ駒ケ嶽ノ死後ハ朝潮、後ノ年寄高砂ト共ニ常陸山ヲ助ケ、常陸山ノ引退後大正五年横綱ニ進ム、身長六尺一寸、体重三十二貫、大正七年引退シテ井筒ヲ襲名ス。検査役取締役等ノ要職ニ任ゼラレタルガ、昭和六年死去ス。時ニ五十二歳、真ニ惜ムベシ、顧レバ第二次世界大戦ニ惨敗シテ以来今ヤ十一年、国粹ノ技タル角道ハ日ヲ逐ウテ益々隆盛ニ赴、此中ニ真意アルニ思フ致シ、今正ニ君ガ成シタル偉業ヲ高ク仰グ、茲ニ下西区民並ニ井筒部屋関係力士行司一同発起トナリ、角道同好者ヲ始メ愛島愛郷ノ士ト相謀リ、此



横綱寄進の灯籠



西ノ海嘉次郎顕彰碑

地ヲ選ンデ碑ヲ
建テ以テ君ガ芳
名ヲ後世ニ伝
フ。
昭和三十一年
十二月二十三日
建立



下石寺の大石様

二五代横綱のはずだがな
ぜか二三代と表記されてい
る。また「嘉治郎」でなく
「嘉次郎」と表記されてい
る。昭和三十一年には、横
綱鏡里がここで土俵入りを
した。

大石様

下石寺塩釜神社への集落
からの入り口近くに大石様
がある。高さ二二〇センチメ
ー、長さ四六〇センチの大石で周りにも大きな石群がある。ここはツ
ンナーメの木（マルバニッケイ）に囲まれている。前には石塔
が一二本立っているがこれが何であるかは不明である。そばに
下石寺の開祖の墓や神社の守り神もある。お盆には石塔祭りが

行われる。また、そばには六道があったという。現在は埋めら
れている。六道があったということは、ここは元は墓だったと
いうことになる。道ができたので、墓は一〇〇メートルくらい離れた
現在地に移ったと思われる。現在の墓に六道がない理由がわか
る。塩釜神社に向かう道脇には、現在のグラウンドのそばにあつ
た八幡様が移されている。

日典寺（川迎）

根本山日典寺と呼び、日典上人を祀っている。日典寺は、も
とは本堂・御廟・庫裡からなっていたが、近年、本堂や庫裡だ
けはもとの姿を残している。御廟は大正七年に造られた。種子
島唯一の華麗な、優れた建
造物といわれている。日典
上人が殉教死したのは寛正
四年（一四六三）のこと
である。上人の法事は、古く
は本源寺及び川迎にあつた
妙泉寺で行っていたが、真
浄院という川迎の僧が上行
塚（日典上人の古墓のあつ
たあたりを上行塚といつ
た）に庵を建て、上人の菩
提を弔った。これが日典坊



日典寺



深教寺

の起源であるという。日典坊は、朝夕の題目法要の場所で、大きな法事については、本源寺や妙泉寺で行われていたという。日典坊がいつ日典寺として建造されたかは明らかでない。墓石を安置する御廟は、「宝永七年（一七一〇）十二月、日典の墓を改めて建つ。石囲みは赤尾木中の信者によって建てられた」と『種子島家譜』にある。その後、弘化二年（一八四五）にも改造されたという。大正七年には建て替えが行われ、宮大工は東町の柳田助右衛門で、建築様式は以前のをそのまま再現したといわれる。昭和三十七年に本堂が建立され、同五十五年に増築、さらに日典寺会館も建立された。史蹟は、誕生地・供養碑・御廟所。資料として、曼荼羅、日隆・日典・日良・日増上人御真筆の四軸。行事としても温座祈念が昭和四十六年に市の無形文化財に指定された。

深教寺

（日蓮正宗、大慧山）

昭和五十六年十一月四日、種子島に日蓮正宗の寺院を、宗祖日蓮大聖人大七百御遠忌記念局の発願により、慶讃記念事業の一環として建立し、当地信徒の道

場とした。この落慶入仏法要には、日蓮正宗総本山大石寺（静岡県富士宮市）から、総本山第六七世御法主日顕上人猊下の御下向を賜り、厳肅かつ盛大に奉修された。爾来、西之表市川迎に法城を置き、熊毛地域の広布の礎とする。

宗派 日蓮正宗（総本山大石寺）

住所 西之表市西之表一五六〇八

建立 昭和五十六年十一月四日

開祖 総本山第六七世御法主日顕上人

王之山神社（遼泊）

王之山神社は遼泊にあり、安徳天皇をお祀りしている神社である。伝説によると、元暦二年（一一八五）の「壇ノ浦の戦い」に敗れた平家は、安徳天皇とともに種子島に落ち伸びてきて一〇日あまり滞在し、硫黄島に行き行宮を建てたという。

昔は宝物殿もあり、古い剣や鏡などが収蔵されていたようだが、明治二十七年七月に盗まれてし



王之山神社

まった。いくら探してもみつからなかったもので、元の鏡をまねて新しく作ったものが現在に伝わっている。

明治以前は茅葺の神社だったが火事にあつてから、瓦葺きにした。火事で巻物も焼けてしまった。安徳天皇の伝説は全国にはたくさんあり、県下にも硫黄島以外に漣泊だけでなく、黒島・トカラ・喜界島などにもあるという。神社入口に王之山祠堂記がある。

若宮神社（漣泊）

王之山神社拜殿の右側に小さな祠がある。これが若宮様である。この若宮様は崇り神として大変恐れられていた神様である。野辺盛純を清時が城ノ浜で殺し、茅原（小牧）に葬ったが、盛

純の崇りがひどく、清時を大変苦しめた。そこで盛純の遺骨を掘り出し、生まれ故郷の大隅半島が見える漣泊の白水原に移して塚を築き、若宮平と名づけられた。

昭和十四年、漣泊で全く魚が獲れない日が続き、物知り聞いたたら若宮様をなすがしろにしているからだと言われ、集落は王之山神



若宮神社

社の境内に、祠を作つて祀り直し、若宮神社とした。

この時若宮平の塚にあつた石塔を若宮神社のご神体にした。

池野神社

大石虎之助著『種子島の社寺・民間信仰神』によると、神社の創建については、

明治初期に古田豊受神社の御分霊を勧請して、奉祀したものとされている。昔は池があつて周りには柳の木が茂り、付近には人家もなく静かな場所だった。その後池野集落では、神社を新しく造り替えることを相談し、池を埋め立て周辺の整理を行い、昭和二十八年十一月十四日、社殿が完成し神殿に奉祀したのである。その後、神社に隣接して池野公民館が建てられ、広場は運動場として憩いの場になっている。境内には「池野先祖累代之顕彰碑」がある。

上石寺神社

昔、石寺集落は製塩地だった。したがって祭神は天照大神である。宝永三年（一七〇六）に上石寺と下石寺に分かれた。上石寺の神社は当初通称ウッチャイロ（字小谷）の丘にあり、馬



池野神社



上石寺神社



下石寺神社

の神様も同じ場所にあった。道が悪く広場もない状態で大正五年に大瀬の丘の上に移した。このときは木造だった。昭和四十八年に鉄筋コンクリートの社殿に建て替えた。旧六月十二日には六月灯、旧十月十二日には願成就が、祝殿の司祭で管理会長と当人二人が執り行う。願成就には九十数年前まで掛け打ち太鼓が奉納されていた。先に八幡様で行い後で神社の下の広場で行われたという。福祭文や蚕の宮じょうはまず上石寺神社で行われる。境内には「塩屋牧地記念碑」と大正三年の「改築記念碑」、手水鉢がある。すぐ下の広場には「虫供養の碑」「馬頭観音」「塩釜の地記念碑」がある。海の近くにあったものを平成元年（一九八九）に移した。東シナ海を望む大瀬の丘に桃色と赤のひととき映える神社である。神社上は公民館、その前はグラウンドとなっている。

下石寺神社

昔、大崎塩屋から五郎右衛門という人が来て製塩を始めた。何年後かわからないが大瀬の岡（上石寺）の方が良いと移って行ったという。石寺塩屋は島内で一番大きかったという。集落からの入り口には下石寺の開祖の墓石や神社の守り神の墓石もある。神社までの小道には八幡様があり、境内には馬の神様もある。昔はここには馬の焼き物がたくさんあったが、現在は一つもない。下の国道脇には日本甘藷栽培初地の碑がある。

甘藷神社（下石寺）

これは墓といった方が適切であるかもしれない。一九代島主種子島久基が、救荒作物として琉球から取り寄せた甘藷を、石寺に住む大瀬休左衛門が苦心の末、元禄十一年（一六九八）日本ですべて初めて栽培に成功させた功績に対して褒美として、下賜したものである。『ふるさと歴史散歩』によると、大瀬休左衛門は元和七年（一六二二）生まれ、製塩を仕事とし、傍ら農業も営んでいた。誠実勤勉で村人の人望を一身に集め、久基の知遇も得ていた。甘藷栽培時にはすでに七七歳の高齢であった。元禄

に七七歳の高齢であった。元禄



大瀬休左衛門夫妻の墓石

十三年（一七〇〇）八〇歳で死去。この時代領主から寿蔵墓（生前に作る墓）を下賜されることは非常に稀なことであり、名誉なことであった。

妙泉寺跡（川迎）

妙泉寺は今の下西小学校の前にあったという。『懷中島記』によると、元禄二年（一六八九）当時は、本源寺末寺妙泉寺、寺領二石、板葺社壇（一間四面）、板葺拜殿（二間四面、板葺堂客殿（五間四面三尺）、茅葺庫裡（三間方）創建年代不詳という寺院であった。妙泉寺は下西の法華宗信徒の拠り所であったが、明治元年七月、新政府による神仏分離令により、同年十



妙泉寺跡の蘇鉄

一月解体された。寺にあった蘇鉄は現在も残っている。

下石寺にあった寺

種子島は、法華宗に改宗するまでは律宗の島であった。律宗から法華宗に改宗する際、法華改宗を承知せず廃寺になった寺もある。あるいは石寺の寺はそ

んな寺であったかもしれない。なぜなら人間の精神世界に深く関わり、その拠点となる寺が一世紀くらいで完全に忘れ去られるものではないからである。したがって「石寺にあった寺は律宗時代の寺であったと考えるのが妥当である」と『下西小学校創立一〇〇周年記念誌しもし』に記されている。



下石寺の寺跡

第一節 郷土芸能

天保時代（一八三〇～一八四四）から東町や西町は歌舞伎を行っていた。上石寺も半太坂（現在ののサムズ付近）で開催した。数日間続けて島内から観客が集まり大変賑わったという。ほかには川迎も行っていたという。出し物は「源平盛衰記」「忠臣蔵」「鎌倉三代記」などであった。

昭和三年（一九二八）に塩屋牧地記念碑を建立しているが、このとき最後の掛打太鼓が披露されたようだ。最初に八幡様で踊り、後、神社の下のノバイロウ（原っぱ）で踊ったという。各集落に三つは曲目があったというが、上石寺には「この城」「締めれば鳴る」「堺北之町」があったと伝わる。また、武部・安城上之町と曲目は同じだったともいう。

種子島の狂言の始まりは、赤尾木湾の波止修築の完成祝いに、柳田来鳳等が上方で覚えて帰り、慈遠寺の広場で公演したものだという。波止竣工は文久二年（一八六二）であるが、上石寺では明治三十八年（一九〇五）から昭和十三年まで公演したという。小牧の河内キヌ氏は、明治四十三年頃、「願成就とかあるいは、何かの落成式の時狂言が行われた。これはその土地の人が行った。石寺・花里などへ学校から帰ると走って見物に行った。台詞まで覚えて来て真似をしたものだった」という。

元旦、神社で集落の長老たちが集まって年始会が行われた。上石寺では、昭和二十五年頃まで行われ、「めでた節」と「高砂」

が歌われた。

川迎の盆踊り

下西小学校作成の資料「下西研究」に次のような記述がある。

川迎の盆踊りでは、円陣の真ん中に笹竹を立てるが、それは精霊の依り代（神霊が現れる時に宿るもの）であり、踊りが精霊を慰める祭りの形式であることを示している。種子島の盆踊りは、歌も踊りも緩やかで、静かである。そこには、先祖の霊を心から供養し、先の世に送ろうとする盆踊り本来の姿がとどめられている。旧暦七月二十一日は、日典上人の命日である。川迎の盆踊りは、この日、日典御廟前、本源寺、栖林神社の順に踊るものであった。昭和の初期頃に踊られなくなってしまったので、幾度か復活させようと取り組みもあったが、伝承者もいなくなり、現在では絶えてしまった。

現在では、川迎では盆踊り・掛打太鼓、漣泊では船祝い、下石寺では掛打太鼓、上石寺では掛打太鼓・高砂が行



川迎盆踊り練習後のひととき（日典寺提供）

われなくなつた。昔は赤尾木の人は「上西の強張、下西の掛打」と言っていたと伝わり、下西はこの掛打太鼓を各集落が競って行っていたそうである。

第二節 年 表

和暦(西暦)	下西校区のできごと
寛正2年 (一四六三)	四月二十一日、浄源院日典遷化す。六三歳(蔵野生まれのため、蔵野に葬る)
寛正6年 (一四六五)	日典の弟子、淡州の沙門浄光院日良来鳥
文正応仁年間 (一四六六～一四六八)	時氏、宗門を改め、三島初めて法華宗となる
慶長17年 (一六二二～一六二四)	(一七代忠時の代) 三月三日、瀬落、大網で前の浦(洲之崎より壟泊に至る)を囲んで魚を獲る。棧敷を西之表に営んで之を見る。西之表の庄吏、酒肴を献上する
正徳2年 (一七一七)	四月十九日～二十一日、日典の二五〇年忌を本源寺に修す
享保2年 (一七一七)	九月、久基、下西之表村、西の小田一反二畝一分を日典坊に寄付する
宝暦2年 (一七五二)	十二月、久芳、甘藷伝を伝える
寛政5年 (一七九三)	九月九日、下西之表村榎本覚左衛門、錢三〇貫を納め、かつ櫛を作るための材を伐ることを学ぶことを以て代々郷士とする
文化8年 (一八一二)	十月十二日、下西の小牧野足軽、山口庄右衛門宅、火、人馬、宗門、手札等、恙なし
文化11年 (一八一四)	三月十四日、下西之表、小牧野土民権右衛門、火、人馬恙なし

		和暦(西暦)	下西校区の(きやう)
明治	文政8年 (一八二五)	二月二十九日、下西之表、郷土榎本貞右衛門、野間村郷土渡辺仙太郎と共に、西之村に於いて瓦を製造する	
	文政11年 (一八二八)	二月七日、下西之表、足軽大瀬休兵衛に一世伐明畑を許す。長年植木見舞として勤労したため	
	文政13年 (一八三〇)	七月二十七日、下西之表、百姓文次郎、錢三〇貫文を納めたことにより、一世足軽となり、山添姓をもらう	
	天保5年 (一八三四)	九月二十三日、一世足軽中原諸次郎を代々足軽とする。製糖が始まった年から、力を極めて甘蔗を蕃殖し、かつ長として数年勤めたため	
	天保6年 (一八三五)	二月七日、下西之表村の百姓良七を一世足軽道具番に任命し、江崎姓を与える。拳法に長けていたことによる	
弘化4年 (一八四七)	二月十三日、米三斗を下西の催子仙次郎に与え、私財を投じて橋を鴨目川に架けたことを賞する		
嘉永4年 (一八五二)	十月十四日、米二石を下西之表の催子仙次郎、役目、及び庶民に与える。橋を鴨目川に架けた日、よく働いたことを賞するものである		
文久2年 (一八六二)	八月七日、米二斗を下西之表の作見舞笹河善吉に与える。作見舞としてよく働いたことを賞するものである		
5年(一八七二)	八月十三日、下西之表の長吉に金一兩与える。数十年製蠟に努めたことを賞するものである		
	旧日典寺を借りて寺子屋の施設とし、肥後雄一氏を招いて教員とし、十数名の子弟を集めて読書、算数などを教授する		

		和暦(西暦)	下西校区の(きやう)
	12年(一八七九)	国発布の教育令により、下等小学校を設置し、旧日典寺を校舎に充て、校名を浜松小学校と称する。これが正則小学校設置の始まりであり、この日を下西小学校創立の日と定める。当時教員一人、生徒三〇余名	
	19年(一八八六)	小学校令発布の結果、二〇年に至り従来の初等科を変更して簡易科とし、校名を浜松簡易小学校と改称する。一日の授業時間は三時間、修年限三年と定める	
	25年(一八九二)	簡易小学校は尋常小学校となり、修年限を三ヶ年とする。小牧野分校を廃止して本校と合併する	
	28年(一八九五)	校舎の老朽化により新たに校地を川迎字蔵の元に決定し、校地の移転と校舎の改築を決定し、同年十二月二十三日に竣工し、竣工式を挙行する	
	35年(一九〇二)	唱歌科を設置する。九月から初めて食事時間を置き、児童に昼食を携帯させる。当時は四年生まで、一・二年生と三・四年生の複式で二教室、それに裁縫室と合わせて三教室があった。門前の「せんだんの木」はこの頃植えたもの。四年を卒業すると榕城校の高等科に入った。高等科二年を終えると農林学校(乙種)に進学できた。しかし進学するのは一七、八名だった	
	41年(一九〇八)	小学校令一部改正、義務教育四ヶ年を六ヶ年に延長実施される。従来の校舎敷地では狭いため、増築の必要があり、区民協議し隣接地を買収して校地を拡張し、九月起工十一月竣工、盛大な竣工式を挙行する	

和暦(西暦)		下西校区のできごと
昭和	大正	
3年(一九一四)		下西尋常小学校を廃止し、榕城尋常小学校に合併する。下西は分教場とし、尋常科三年以下の児童を収容する
9年(一九二〇)		分教場が廃止され、尋常小学校設置が認可される
昭和		
11年(一九三六)		男一・四名、女一・八名、計二三三名、六学級編成、本年から一学級増
16年(一九四二)		国民学校令の公布により、下西国民学校と改称(四月)。十七年高等科設置
22年(一九四七)		新校舎上棟式、裁縫室の整理移転(一月)。下西小学校となり、六学級となる
31年(一九五六)		水道工事着工、五月二十二日より使用開始。新校舎ブロック造り起工式(十月)、三十二年五月落成。児童増が続き三一一名、八学級となる
40年(一九六五)		鉄筋第三期工事着工(十月)、四十一年五月落成。これで二階建て校舎が三期に分けて完工した
55年(一九八〇)		邊泊漁具倉庫(構造改善事業)完成(一一六五〇千円)
		創立百周年記念式典及び祝賀行事挙行
		下西若宮集落発足(四九戸)
58年(一九八三)		下西地区林業振興会集会施設落成式
60年(一九八五)		下西地区農免農道完成(四四八一メートル)
		池野公民館落成祝賀
61年(一九八六)		上石寺地区団体営農道完成(一〇六二メートル)
		鞍勇集落移住百周年記念祭

和暦(西暦)		下西校区のできごと
平成		
元年(一九八九)		防火水槽整備事業(下西地区)完成
2年(一九九〇)		新校舎起工式、正門近くにあった古いセンダンの木が新校舎建設の為に伐採された。四年に新校舎落成式
4年(一九九二)		下石寺集落集会施設落成
6年(一九九四)		下西小学校へき地教員宿舍建設工事完成
7年(一九九五)		下西小学校グラウンド整備工事、給食室改修工事完成
		団体営農道整備事業下西地区完了
		新下西消防団詰所拠点施設落成式
11年(一九九九)		県学校緑化コンクール優良校受賞
		地区花壇コンクール努力賞受賞
		体育館横通路舗装工事
30年(二〇一八)		校舎・わたり廊下外壁塗装完成



鞍勇のカカシ (中原康信氏提供)



船祝い

暮らしの風景写真



川迎蚕の宮じょう (中原康信氏提供)



日典上人お廟



下西小学校センダンの木伐採 (平成2年)
(前田和徳氏提供)



サイヨウ (地突き) (昭和56年)



城ノ浜夏祭り (平成19年)
(中原康信氏提供)



若宮団地